

2018年度卒塾生 自信

自らを信じると書いて「自信」。文字通り、自分自身を信じることができているという状態が“自信がある”ということであろう。2018年度卒塾生一彼にはいつもそんな自信があった。

彼が入塾してきたのは中2の始めである。入塾テストを受けに来た彼は、背が高く精悍な顔つきだったが、話し方はとても穏やかで遠慮がちだった。入塾テストの結果は、荒さはあるものの基本は身につけていて、自分で学校の授業をしっかりと理解しようと頑張った跡の見えるものだった。「学年順位で20番以内には入りたいです。」との目標。230人くらいいる中で、現状は一年間90番台から60番台の間を行き来し、一度30番台になったことがあるというもので、やる気は十分である。“この子なら鍛えれば20番内にすぐに上がる”一彼の残した英数の答案を見て私は内心そう思っていた。

スタート後、案の定実力はメキメキ伸びてきた。中2になって初めてのテストでの順位は28位、次のテストでは26位、次は25位……。順調ではあるのだが、私の想定とは違う。実は原因ははっきりしていた。国語が極端にできないのである。いや、テスト勉強をやらないといった方が正しい。“嫌いだからやらない。その分他で点を稼ぐ。”これが彼のスタイルだった。しかし、いくら他教科を80~90点台に揃えても、国語が50点台では話にならない。国語のテスト勉強もするよう促したが、変な頑固さを内に秘めている彼は、結局改善することなく国語のテスト勉強は後回しのままだった。2年の終わり、学年順位は20番台前半までは来ていた。そんな彼がお母さんに言っていたのは、「僕をこんなもんだと思わんでよ。」という自信とプライドにあふれた言葉だった。「自分は理解出来ている、まだまだ伸びる」という自分自身への絶対的な自信を持っていたのである。だが、中3を目前にした2年末、内申は31しかなかった。

定期テストで点を取るためだけのあまり意味が無く思える暗記勉強はしたくない、内申を上げるためだけに必死に挙手したり先生に気に入られようと振る舞うことはしたくない……。口調の柔らかさとは裏腹の、彼のそんな内面の激しさ、ポリシーを否定することなく志望校合格を果たさせるには真の実力をつけさせることだった。定期テスト勉強ではない、実力アップのための国語の勉強を提案すると彼は受け入れ、完璧に続けて、3年に上がる前にはやり遂げた。

決して曲げなかった千種第一志望。最終的には学年順位も5番、内申も39まで上げたものの、40に満たない内申で合格を果たしたのは、国語を含め抜群の実力を身につけたためである。バレーボールの県の強化選手に選ばれていた彼。これからもカッコ良く生きることを貫くのかな。